

## 大衆文学の転換 ——大佛次郎「ごろつき船」を中心に昭和3、4年の夕刊小説

中村 健（大阪市立大学学術情報総合センター）

### 概要

昭和3年から4年の大朝、大毎夕刊の連載小説の紙面をたどり大衆文学の変化を探り出版界との関連を考察した。①作家によってはトレンドの変化にあわせて作品を仕上げる事が可能であり、変化についていけるものといけないものに分かれてきた。②流行の傾向や名作を次々にものにすることで作家のブランドが確立される時期になった。③伝記など事実を重視した歴史小説が登場した。④社会意識を盛り込んだ歴史小説が登場した。

キーワード 新聞小説、大佛次郎、赤穂浪士、思想性、大衆文学

### 1. はじめに

大衆文学の歴史は昭和初年から順調に発達してきたように言われているが、経年で見ると小さな転換点がいくつも存在している。そのひとつが昭和3年から4年にかけての大阪朝日新聞（以下、大朝）・大阪毎日新聞（以下大毎）夕刊の連載小説紙面から確認できる。連載紙面や広告などを使い、その傾向を探る。

### 2.1 昭和3年から4年の状況と分析

図1 新聞連載見取り図

	夕刊の連載小説				白井喬二の動向		雑誌・その他
	大朝 三面	大毎 三面	その他1	その他2			
① 昭和二年	大佛次郎 「照る日くもる日」 <span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 2px;">伝奇</span>	吉川英治 「鳴門秘帖」 <span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 2px;">伝奇</span>			立富 つ士 影に	源平 盛衰 記	
	土師清二 「砂絵呪縛」 <span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 2px;">ニヒリスト</span>		<span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 2px;">ニヒリスト</span>	<span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 2px;">伝奇</span>			
② 昭和三年	下村悦夫 「愛憎乱麻」 <span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 2px;">打切</span>	林不忘 「新版大岡政談」 <span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 2px;">ニヒリスト</span>	大佛次郎 「赤穂浪士」				
	国枝史郎 「娘煙術師」 <span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 2px;">打切</span>		<span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 2px;">大絶賛</span>	<span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 2px;">打切</span>			
③ 昭和四年	講談「松平長七郎」	大佛次郎 「ごろつき船」 (改題「海の隼」)					平凡 朝日
	吉川英治「貝殻一平」	大佛次郎 「由比正雪」 <span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 2px;">歴史</span>			祖国は 何処へ		国史

※昭和4年の主な出版物は小林多喜二『蟹工船』、徳永直『太陽のない街』

①「富士に立つ影」「鳴門秘帖」「照る日くもる日」の終了する昭和2年の夏ごろ、②「赤穂浪士」「砂絵呪縛」「新版大岡政談」の終了する昭和3年の中ごろである。③打切作品が目立つ時期がある。昭和3年後期から大朝の紙面が顕著。下村悦夫「愛憎乱麻」、国枝史郎「娘煙術師」は打切、その後、講談が復活。大きな意味での打切りとして『キング』に対抗するために創刊された博文館『朝日』、平凡社『平凡』の失敗した時期も含まれる。④は歴史小説の台頭の時期である。

## 2.2 3 作品の評価

国枝史郎「娘煙術師」と下村悦夫「愛憎乱麻」は失敗作、大佛次郎「ごろつき船」は成功作との対照的な評価がなされている。失敗作である「愛憎乱麻」は作家の創作態度に、「娘煙術師」は内容に、その原因が求められている。この裏には読者の反響を呼ばない作品は打ち切るといふ新聞社の冷徹な経営視線が伺える。当初圧倒的な評価を得た大佛次郎の「赤穂浪士」でさえ、作品が佳境に入ったにもかかわらず営業部から「部数がとれない」との進言で打ち切りされたエピソードにもその方針は顕著に出ている。大佛次郎は「自分たちは一日中働いて、夜、疲れた頭で、楽しみに読むのだからもっと易しく書いてくれ」読者からはそんな風に言って来る。主に大阪の方の読者である。」(大佛次郎「史実調査のいろいろ」文学時代昭和4年11月号)という意見があったことを記している。

この時期に、打ち切りが多いのは、作品の質が低下したものなのか、それとも新聞社の要求が厳しくなったのかを、求められる作品傾向の変化か、それとも別の理由かを、③の時期に、無事連載終了した大佛次郎「ごろつき船」の連載紙面を検証することで考えたい。

## 3. 「ごろつき船」

### 3.1 映画広告との連動が見られない状況

「照る日くもる日」「鳴門秘帖」の競作期、「砂絵呪縛」「新版大岡政談」は阪東妻三郎、大河内伝次郎の当たり役となり映画でも大ヒットを飛ばした。しかし、つづく3作は映画があたりをとったという評価はない。それを裏付けるように、「愛憎乱麻」「娘煙術師」は、連載紙の朝日新聞紙上で映画広告がまったくといっていいほど見られなかった。また、「ごろつき船」も大毎昭和3年9月19日付に舞台化の記事はあったが、映画広告は見られなかった。「照る日くもる日」「鳴門秘帖」「砂絵呪縛」「新版大岡政談」に見られた大衆文学と映画の連動はこの三作においては確認することができなかった。

### 3.2 『赤穂浪士』のベストセラーを追い風に

#### 3.2.1 紙面のデータ

紙面で目に付くのが、「赤穂浪士」の図書広告の大量出稿期と重なっている点である。「赤穂浪士」は「東京日日新聞」に連載されていたので、関西の読者にとっては単行本としての発行が、初めてのお目見えの時期になるだろう。

表1 大毎に見る「ごろつき船」連載と「赤穂浪士」(改造社)の図書広告と関連記事

連載	「赤穂浪士」広告とコピー	関連記事
5/30 予告, 6/1 連載開始		
	10/25 朝3 上巻発売 「今秋読書界の大王」 劇は澤田正二郎上演, 映画は日活超特作	
	10/31 朝3 上巻 千葉亀雄・徳田秋声・佐佐木信綱・猪俣津南雄 コメント	
	11/2 朝3 上巻 「忽ち80版突破」 岡栄一郎, 三上於菟吉, 直木三十五, コメント	
		11/19 朝5 渡邊均「新刊書二種」で「赤穂浪士」を紹介
	11/27 朝3 中巻発売 「『真実の武士道』の教科書として其売行出版界を風靡す」「赤穂浪士(上巻)八十版突破」	
	12/14 朝2 上・中広告「上巻 90版, 中巻 80版」「正しい忠臣蔵全国を風靡す」	
1/1 「海の隼」に改題		
	1/10 朝2 上・中巻 「読書界の大王」 「下巻 未発表原稿著者執筆中」	
	2/8 朝2 上・中巻 「読書界の大王」「上巻百版, 中巻九十版」「下巻 2月中旬出来」 「目下 澤田正二郎上演」「正しく新しき忠臣蔵により全民衆の義士観一変す見よ」	
	2/19 朝2 上・中巻 「読書界大王」「下巻 近刊」	
	3月 澤田正二郎と 赤穂浪士	3/5 朝2 澤田正二郎死去 赤穂浪士を公演中, 発病, 入院後に死去。大佛次郎のコメントあり
		3/31 夕2 新国劇の澤田正二郎追悼公演に「赤穂浪士」前篇あり
4/12 彼らの城	4~5月 革命的な内容に	
		4/16 夕2 新国劇公園に「赤穂浪士」中篇
4/24 破裂		
	4/27 ごろつき船 上巻 改造社広告に「赤穂浪士 上巻百版, 中巻九十版」あり	

	5/2 朝2 ごろつき船 上巻 「痛快淋 ○現大衆文学の圧巻」「赤穂浪士 上巻百 版, 中巻九十版」	改造社の広告上で 「ごろつき船」(主)と「赤 穂浪士」(従)と一緒に
	5/8 朝3 ごろつき船 上巻 「この突風 的売行を見よ」「赤穂浪士 上巻百版, 中 巻九十版」	
	5/13 朝2 ごろつき船上巻 「凄壮無 比! 快男子の活躍」「赤穂浪士 上巻百版, 中巻九十版 下巻 五月下旬出来」	
6/11 最終回		

- 本誌夕刊所載「ごろつき船」でお馴染みの大佛次郎氏の長編小説「赤穂浪士」が改造社から出た。  
(渡邊均「新刊書二種」大阪毎日新聞昭和3年11月19日付)
- 赤穂浪士の評価をした上で「今「大毎」に出して居る「ごろつき船」も、規模の雄大と、氏の自信は相当なものらしい。」(千葉亀雄「作家大佛次郎君」『改造』昭和4年1月号)  
ちなみに2年前の連載では大佛次郎は『ポケット』との関係を強調されていた。

表2 「照る日くもる日」における『ポケット』との関係

	『ポケット』の広告	
大正15年 7月7日付	「安い、面白い、新しい 天下到る処大評判!!」 「大衆文壇の第一人者、大佛次郎氏の力作」(「からす組」)	
大正15年 8月4日付	「本誌専属の新進大家 大佛次郎氏の本号に於ける大活躍振りを見 よ!!!」	
(参考) 大正15年 8月8日付	作者は『鞍馬天狗』や『御用盗異聞』で一躍雷名を轟かした人、現 に三十余の匿名をもつ大衆文藝壇を縦横に馳駆している勇士です。 大佛次郎というのも実は世をたぶらかす覆面の名で、本名は野尻清 彦(以下略)	連載の予告
大正15年 9月7日付	朝日愛読者に薦む!! ポケットは娯楽雑誌界の花形	

### 3.3 次代につながる内容

内容面の検討にあたり、大佛次郎のこの言葉を紹介したい。

「私は仏蘭西の歴史に興味を持っている。嘗つて、仏蘭西革命を、大衆文学風に書こうと計画したことがあって、吉江喬松氏に或る新聞社に話をして頂いたが纏まらなかった。今日のブルジョア新聞には、革命などを取り扱ったものはとても載せられないと諦めている。」(大佛次郎「史実調査のいろいろ」文学時代昭和4年11月号)

「ごろつき船」の時代が違う二つの作品紹介を見比べていただきたい。

大衆文学研究会編集「歴史・時代小説事典」(実業之日本社, 2000年)の福島行一の解説。  
「幕末の松前藩で、家老の蠣崎主殿は廻船問屋の赤崎屋吾兵衛と結託して、利益をひとり占めにするため、商売敵の八幡屋に密貿易の嫌疑をかけて、取り潰しを図る。その不正を嗅ぎつけ、正義のために立ち上がったのが同心、三木原伊織で、偶然、松前にやって来た江戸の怪盗、佐野屋惣吉と志を併せて、焼け落ちる八幡屋から遺児、銀之助を救い、自

らはエゾ地の奥深くへ逃亡する。伊織の留守宅では、残された妻子が危険にさらされていた。ちょうど、幕府の巡見使が諸藩の实情視察に訪れ、同行したもと旗本の土屋主水正、伏見覚田などが来合わせ、蠣崎一派の陰謀に立ち向かうこととなる。」

戦前の昭和8年「日本文学講座第十四巻・大衆文学篇」(改造社, 1933年)に収録の解説。「時は徳川中期。所は蝦夷地。ときの領主松前藩を背景とする。先づわれわれは、この物語の導火線として、勃興するブルジョアジーと早くも結託しようとする悪玉武士を認める。すなはち、作者は先づ二大廻船問屋赤崎屋と八幡屋を当時のこうした時代状況と関係づけて描き出す。そしてその一方、赤崎屋吾兵衛を、藩の家老蠣崎主殿を結びつけ、商売敵八幡屋六右衛門と対立することによって物語りの火蓋を切る。八幡屋六右衛門は赤崎屋一味の奸計にかかって横死する。八幡屋の没落。この二大対立の一つは果敢なく地平線上から消える。しかし、物語はここに初めて本筋にながれるわけである。時の政治権力と巧みに握手して、ひとり横行する大ブルジョア赤崎屋をかこんで、今は全く地下に没した八幡屋一味。六右衛門の嗣子銀之助を中心として、時代に志を得なかった武士。同じく、権力階級と手を組むことを潔としない反逆僧、或る意味で当時のブルジョア勃興精神の最も正しい体现者とも考えられる俠客的市民等のグループ。すなはち所謂よき意味でのごろつき活躍が展開される」

### 3.4 紙面の傾向と作品傾向のまとめ

「ごろつき船」は時代小説風の復讐劇からスタートした。事件の発端から正義派の関係者が次々と弾圧をされて不遇の境地に落ちていく「暗い」展開であった。そして、一度、あらすじの紹介があり、さらに、暗い展開は続く。こうした展開に3.3で記したように社会状況を結びつけて読解することも可能であった。そして秋になり、「赤穂浪士」の広告が載る。「赤穂浪士」がベストセラーであり、大衆文学としてはかつてない高級な内容をもった小説であることが広告されている。そして「赤穂浪士」の作者が書く「ごろつき船」というイメージが生まれ、注目されてくる。そして一月に改題、さらに「赤穂浪士」中巻の発売、澤正の死により「赤穂浪士」の話題は途切れることなく続く。そのうちに「ごろつき船=海の隼」は、いよいよ作者の本領である革命ロマンへとシフトをしていくことになる。そして「ごろつき船」は「赤穂浪士」が同じ改造社から刊行され広告でも並んで掲載されることになった。「赤穂浪士」の名声で「大佛次郎」というブランドが確立され、その余波を受ける形で「ごろつき船」の評判も作られていることが伺える。また、当初、伝奇時代小説の衣をまとっていた本作であるが、終盤には革命ロマンの色彩を帯び社会思想を備えた時代小説と変化する。過渡的状況に合わせた内容の変化は技法的な特徴と見える。思想性の表現を次章では考えてみたい。

## 4. その他の動向

### 4.1 『平凡』『朝日』から出なかった大衆文学の名作

『平凡』『朝日』は『キング』に対抗するために創刊、失敗。多くの大衆作家が作品を掲載したが、『キング』における吉川英治「剣難女難」、下村悦夫「悲願千人斬」のような成功作は生まれなかった。「キング」「サンデー毎日」のように新刊雑誌と大衆文学の名作が結びつくことはなかったのが、従来とは違う点。失敗の原因を大宅壮一「『平凡』の廃刊と大衆雑誌の将来」（『中央公論』昭和4年4月号）、「各雑誌評判会」（『文藝春秋』昭和4年新年号）、内海幽水（新聞の表記は幽水生）「雑誌の将来」（「大朝」昭和4年1月8日付）などが分析。本発表では内海論文を使用。「講談雑誌に評論雑誌の匂いを持たせて、成ろうことなら婦人雑誌の特色の幾分を加味したい、というのが新刊の「平凡」や「朝日」のねらいどころであるが、さてでき上がったものはどうだろうか」

「朝日」について→「文藝倶楽部」のお余りの原稿を詰め込んだものとしか受け取れない。「平凡」の方はそれなりに評価している。ここで注目したいのは、内海氏は明確に雑誌の狙いどころを指摘している点だ。この時期、求められているいわば「売れる」ニーズの一つを述べている。ここから雑誌という語を抜いてみよう。「講談に評論の匂いをもたせる」という言葉であれば、これは④の時期に現れてくる小説群がそれに該当する。つまり、著者の思想性や歴史観を明確に示した歴史小説である。大佛次郎・吉川英治は「社会批評」「評論」、つまり思想性をもつことで「講談」を「文学」に発展させていく。まさに、かれらが昭和4年ごろから発表する作品の傾向を言い表している。

#### 4.2 夕刊小説の変化（図1の黒線部）

新聞小説に新たな転換の萌芽が見える。夕刊の一面に短期間連載され、好評を博した。

- ・ 邦枝完二「東洲斎写楽」大朝昭和3年8月26日～10月10日
- ・ 村松梢風「綾衣絵巻」大毎昭和3年9月9日～12月2日

「綾衣絵巻」については、昭和4年6月14日付田中貢太郎「旋風時代」の予告に「綾衣絵巻」に事実小説の先鞭をつけた本社は、第二の事実小説たるこの小説を提供することによって、一層の圧倒的喝采を得べきを信ずる」とあり、「事実小説」というジャンル名で括って、大毎におけるその先駆け作品として評価している。真鍋元之『大衆文学事典』（青蛙房、1967年）では「情話」というジャンル名を与えており、「この作者に独自の伝記読物。ただし当時の大衆文学界では“伝記”の概念が明確でなく、この種の作品は“情話”の名でよばれることが多かった」。のちの海音寺潮五郎の動きにつながる。

「東洲斎写楽」についても「情話」「事実小説」というくくりは与えられていないが、内容および、邦枝の浮世絵研究がもとになっているから、同様の歴史小説とみられる。

### 5. まとめ

#### 5.1 現象については概要に記す

#### 5.2 課題

- ・ 関西ゆかりの下村悦夫の評価。